

キャノン電子テクノロジー

大規模バッチシステムの開発、メンテナンス内製化をノーコードで実現

組織横断型のデータ活用を図る上では、個別に運用されているシステムのデータをデータウェアハウスに集約して分析するアプローチが一般的だ。インテリジェント・モデルの「ODIP」は、そこで必要になる大規模かつ複雑なバッチ処理の構築をノーコード開発によって簡素化する。キャノン電子テクノロジーは、このODIPと独自のデータモデルを合わせて提供することで、顧客企業のデータ活用環境構築を支援している。



キャノン電子テクノロジー株式会社
金融ビジネス部
部長
齋藤 慶氏

個別最適化されたシステムが組織横断型のデータ活用を阻む

DXの中核テーマの1つであるデータ活用。しかし、企業内で運用しているシステムが、それぞれ個別に構築されてきたために、仕組みやデータの個別最適化・サイロ化が起きているケースは少なくない。「当社のある金融機関のお客様も、同様の状況に悩んでいました。複雑化・多様化する顧客ニーズに対応するため、パツ

ケース製品などを随時採用してきたのですが、それによって各システムがサイロ化。システムをまたいだデータ活用が円滑に行えず、せっかくの情報資産を有効活用できていない状態だったのです」とキャノン電子テクノロジーの齋藤 慶氏は振り返る。例えば、データの桁数や型がシステムごとにばらばらで、コード体系が違う、あるいはデータ内容の定義自体が異なるといった状況だった。各システムから収集したデータもそのままでは分析に用いることが

できず、差異を吸収するための名寄せやクレンジングといった加工作业に多くの工数が必要だったという。そこでこの企業は、迅速かつスムーズな組織横断型のデータ活用を実現するための取り組みを開始。全社統一のデータモデルを定義するとともに、各システムから収集したデータをそのデータモデルに準じて加工。その後、データウェアハウス(DWH)へ格納する大規模バッチシステムの構築を目指すことにした。「その際、このお客様は、『随時発生するデータの追加、変更の要求にも柔軟に対応されること』『処理がブラックボックス化しないこと』『将来的なシステムの保守や拡張が内製開発でまかなえること』などを要件に掲げました」と齋藤氏は紹介する。

GUIベースのノーコード開発で開発・運用の内製化に寄与する

この要件を満たすため、採用したのが

インテリジェント・モデルの「ODIP」だ。ODIPは、大規模バッチシステムの構築に特化したノーコード開発ソリューション。金融をはじめ鉄道、公共、製造などの業界で多くの導入実績を持っている。数百人月から数千人月規模のプロジェクトで多く用いられており、プロジェクトの規模が大きいくらいほど、より高い生産性を実現できることがその大きな特徴だ。「当社はインテリジェント・モデルのパートナーとして、ODIPを活用したデータ活用環境の構築を支援しています。今回は、当社の金融機関向けデータモデルとODIPを組み合わせることによってお客様の要望にお応えできると考えました」と齋藤氏は語る。

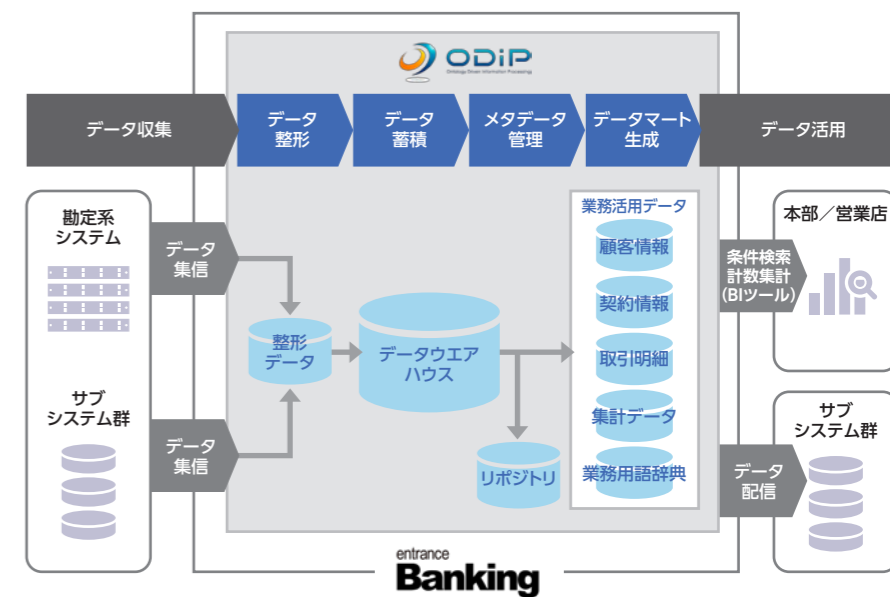
導入に先立って実施した検証では、金融機関の業務で一般的な日次・月次の処理をキャノン電子テクノロジー独自のデータモデルをベースに実装。実運用に耐えられる処理パフォーマンスが得られることを確認した。

「今回のシステムはDWHに集約した情報を分析・集計するだけでなく、その結果を外部システムへ連携することを予定していました。そのため、パフォーマンスはデータの鮮度や処理速度を担保する上で重要な条件でしたが、お客様に満足していただける結果が出せました」(齋藤氏)

GUIベースのため容易に開発が行える。この金融機関では、システム開発の高度な知識やプロジェクト経験を持たない人材でも、約1カ月あればODIPを使いこなして開発に携われると評価したという。

運用面も同様に、GUIベースで行えることや、金融機関が日頃慣れ親しんでいる業界用語で処理定義を行える点がメリットとなった。さらに、DWHに展開される情報のメタデータやリポジトリデータの集中管理、設計書の自動生成機能なども実装。不要な処理や重複処理を排除しながら、データ項目などの変更時の影響範囲を可視化している。「これにより、変更対応時の影響調査も容易にしています。システムの

キャノン電子テクノロジーの「entrance Banking」



独自の金融機関向けデータモデルとODIPを軸に、金融機関における高度なデータ活用環境の構築をトータルに支援する

ブラックボックス化や肥大化・複雑化を防ぎ、高度なメンテナンス性を維持できています」と齋藤氏は説明する。

機械学習、大量データの分析などSoE領域を担う機能も随時強化予定

以上のようにこの金融機関では、キャノン電子テクノロジーの金融機関向けデータモデルとODIPを用いて、組織横断型のデータ活用に資するDWH環境を構築した。

また、キャノン電子テクノロジーは当該プロジェクトの取り組みを機に、同社が保有するデータモデルとODIPを組み合わせた金融機関向けのDWH構築ソリューションとして「entrance Banking」の提供を開始した。実際の顧客プロジェクトで得た知見・ノウハウをソリューション化することで、同様の課題に直面するほかの金融機関にも解決策を提示できるようにしている。「entrance Bankingは、勘定系やその

ほかのサブシステム群から必要なデータを収集し、クレンジングを行ってDWHに格納するプロセスや、そこから業務要件に応じたデータマートを生成し、BIツールで分析したり、サブシステム群でデータ活用を行ったりする一連の仕組みを実現可能です」と齋藤氏は紹介する。

比較的小規模・短期的なプロジェクトで利用されるケースが多いノーコード開発ソリューションの世界で、大規模バッチシステムに特化したODIPは個性的なソリューションといえる。機能自体もインテリジェント・モデルによって継続的に拡張・強化されており、SoE領域で役立つ機能はもちろんのこと、機械学習や大量データの分析など、SoE領域の新規サービス提供に資する機能の拡充も順次行われているという。

バッチ処理の側面から企業のDXを加速させるノーコード開発ソリューションとして、今、ODIPに大きな注目が集まっている。

ODIPを採用したポイント

1	2	3
<p>大規模・複雑なバッチ処理を実現できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ●バッチ処理に必要な処理パターンを網羅していた ●大量データ・大量プロセスの処理が問題なく実行できた 	<p>内製化が実現できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ●慣れ親しんだ業務用語を使用した処理定義による構築、メンテナンス ●簡単なGUI、処理定義による構築、メンテナンス 	<p>高いメンテナンス性</p> <ul style="list-style-type: none"> ●スクラッチ開発の8割程度をノーコードでツールがカバーできた(対応すべきバッチ処理については、ODIPですべてカバーできた) ●メタデータ/リポジトリ元管理による影響分析が容易だった
<p>金融機関の業務バッチ処理(日次・月次)が問題なく実現・運用できた</p>	<p>可視化に優れた仕組みが実現できた</p>	<p>肥大化・複雑化を防止するための仕組みが充実していた</p>

大規模・複雑なバッチ処理のパターンに網羅的に対応可能な点、分かりやすいインターフェースや操作性によって開発/メンテナンスの内製化に寄与できる点などが決め手となった

お問い合わせ



株式会社 インテリジェント・モデル
TEL: 03-5531-0062 E-mail: info@imkk.jp
URL: https://www.imkk.jp/